



巻 頭 言

「心して食べるということ」

くらしとバイオプラザ21理事 三保谷 智子

昨年、『栄養と料理』は創刊88周年(米寿)を迎えました。情報を得る手段が大きく変わった今、紙媒体の雑誌を刊行し続けるのは容易ではありません。誕生のきっかけは講義録でしたが、支持者を得て2号目から広く一般の方も対象になります。昭和、平成、令和、と時代を経ても、「食生活と健康」のテーマは揺らぐことはありません。

第二次世界大戦末期はやむなく1年の休刊を経て、1946(昭和21)年1・2月号で復刊を果たします。その中に、香川綾は「希望の春」と題した一文を寄せています。

「敗戦後の冷厳さはたとえようもない有史以来の惨事です。しかし世の中がどんなに変わっても、その底に秘められた真実は変わることはありません。今こそ、社会も家庭も真剣に栄養改善と食糧自給の方法を工夫すること。すべての苦しみと悲しみを越えて、懸命に各自の使命を果たすことが大切です。食生活の再建は、やがて平和な日本を作るための新鮮な力になります。」(概略)

先人たちが苦労して乗り越えてきた歩みに思いを馳せることで、自然災害から復興する道のりにも勇気もらえるような気がします。

ふり返れば、88年の食生活の変化は経済発展や科学技術の発達とともにあります。

一つの契機が1964年の東京オリンピック。戦争で疲弊した日本は公衆衛生や食品衛生の面で立ち遅れ、人々の寄生虫保有率は高く、結核と並び国民病ともいわれていました。野菜の栽培と食べ方にも変化があります。戦後、日本に駐留する米軍兵士が食べるサラダ用野菜を供給するために、基地周辺で清浄な環境で管理されたレタスなどの栽培「清浄野菜」が始まります。清浄野菜の啓発記事に続いて、西洋野菜の紹介や野菜サラダの企画が見られるようになります。それまでの日本人は野菜を煮たりゆでたり、漬物として食べるが多く、レタスやセロリを生食する習慣は一般にはありませんでした。

オリンピック前年のカメラルポ「清浄野菜」では、水田の裏作の換金作物として始まった清浄栽培のレタス、土を使わない礫耕栽培(小石の栽培床に肥料液

を循環させる)のサラダ菜を紹介しています。今でいう植物工場がすでに始まっていたことに驚きます。

オリンピック選手村食堂への野菜供給にあたっては、事前に清浄野菜の耕作地への視察を企画し、参加国に納得してもらったそうです。

オリンピック開催期間中、1日7000食、1人分6000kcalの食事を提供するには、あらかじめ肉、魚、野菜などの食材を冷凍するなど、冷凍設備の充実や冷凍技術の開発は必須でした。また、選手村食堂を統括する調理システムとして食材の供給を一手に担うサプライセンターを設置し、各料理に合わせて下ごしらえした食事を各食堂に提供する合理的な方法を採用しました。これがのちのコールドチェーン(低温流通機構)の発達、ファミリーレストランなどのセントラルキッチン等、外食産業への発展へとつながります。

1ドアで冷凍室付きの冷蔵庫の発売は1961年です。冷凍素材を活用する以前に、まだ家庭の台所設備も整っていない時代でした。1969年は一般家庭に冷蔵庫が独立した2ドアタイプの冷凍冷蔵庫が普及し始めます。冷凍食品の使い方や作り方、解凍法、冷凍食品活用で食事のしたくをスピードアップするアイデアも積極的に紹介しています。

東京オリンピック以降、6年ぶりに世界中の人が日本に集まったのが1970年の大阪万国博覧会でした。約30の外国館の本場の味を競うレストランが世界の味フェアを開催して話題に。万博の台所は冷凍食品でまかなわれたともいわれたそうです。このころ、冷凍食品の品質保障の表示、JAS(日本農林規格)や業界団体の認定制度が動き出したのです。

そして55年が経ち、豊かさや便利さを追い求めた結果、地球環境に負荷をかけない食生活が求められるようになりました。ありがたいことに、学生時代に身についた「なにをどれだけ食べたらよいか」の指標が私の健康を支えてくれます。食材選びから、調理、食べ方、片づけに至るまで、心して日々の暮らしを整えていきたいと思っています。



筆者紹介

くらしとバイオプラザ21理事。

元『栄養と料理』編集長(女子栄養大学出版部)。

立教大学文学部卒業。香川栄養専門学校栄養士科卒業。

栄養士。食生活ジャーナリストの会会員。



(写真提供 食品化学新聞社)

食のミライ技術フェア2023(11月24日)

お茶の水ソランティで、食のミライ技術フェア2023「ヒトにも環境にも優しい食品添加物」が開かれました(共催:一般社団法人日本食品添加物協会)。「食品添加物の不使用表示ガイドライン」の猶予期間が2024年3月末で切れることから、消費者庁、日本食品添加物協会、消費者の立場としてくらしとバイオプラザ21の3つから情報提供・質疑応答を行いました。ガイドラインができてから今日までに消費者庁に、主に事業者から寄せられた質問の分析からは、事業者によって不使用表示の持つ意味や狙いが異なることが浮き彫りになりました。



札幌大学(10月3日)

フォーラム「バイオ燃料を考える」が札幌大学・アメリカ穀物協会共催により開かれました(於 札幌大学)。バイオ燃料を利用することで日本はカーボンニュートラルを目指せるのか、いろいろな立場から話題提供が行われ、参加者全員で意見交換を行いました。参加者は札幌大学地域共創学群経済学系「地方財政論」(担当 武者加苗教授)を学ぶ学生の皆さんでした。冒頭、担当の武者加苗教授より「北海道でカーボンニュートラルをどのように実現していたら良いか」を念頭においてこのフォーラムを進めるという趣旨説明があり、北海道の将来を見据えた前向きな発言が多くありました。



(写真提供 アメリカ穀物協会)



(写真提供 長崎県食品安全・消費生活課)

長崎県 食品の安全・安心リスクコミュニケーション(10月21日)

長崎県では、親子で参加できる企画も含めて、工夫をこらしたリスクコミュニケーションを継続的に行っています。この日は「遺伝子組換え食品について～表示改訂を機に考える」というお話をさせていただきました。日本国内で遺伝子組換え穀物はどのように使われているか、表示はどのように改定されたか、食品としての安全性確認の仕組みと一緒に説明しました。事前質問も多く、会場でも自分のこととして考えておられることが伝わってくる質問が出てきました。後援の生活協同組合ララコープからも多く会場参加されていたことは、嬉しいことでした。

<https://www.pref.nagasaki.jp/shokuhin/anzen/risk/detail.php?id=245>

ステークホルダー会議 福島大学 (11月23日)

福島大学農学部「アグリビジネス論」で、ゲノム編集をめぐるリスクコミュニケーション」という講義をしました。講義の内容は、ゲノム編集技術についての説明、実用化された事例(GABAというアミノ酸を多く含むトマト、肉厚のタイ、成長の早いフグ)の紹介、食品としての安全性と環境への影響評価の考え方、表示のルール、遺伝子組換え技術との相違点、消費者の受け止め方です。その後、クラスの中に消費者、生産者など4つをつくって、ワークショップ「ステークホルダー会議～ゲノム編集ジャガイモを使いますか」を行いました。YESと回答したグループのほうが多くあったことが印象的でした。



(写真提供 原田英美准教授)



保育園でSDGsワークショップ(1月21日)

赤門小規模保育園(東京 文京区)でSDGsワークショップが行われました。同保育園の対象は1-2歳の乳幼児で、今回のワークショップの参加者は卒園生(4歳から5歳)とその保護者でした。SDGsは幼少期からの教育が大事だといわれていますが、具体的にどんなことができるのか、取材をしてきました。保育園スタッフ、中学生、保護者らが、子どもたちが飽きないように、体を動かしてSDGsを考えるプログラムをつくって行われました。おみやげは、ペットボトルキャップでつくった宝石のようなペンダントやキホルダーでした。

サイエンスアゴラ

2023年11月19日、サイエンスアゴラ2023にて「ゲノム医療って何だろう～悲しむ人をつくらないために」を開きました。中学生からシニアまで、立ち見が出るほど多くの方にご参加いただきました。

策定されたゲノム医療法について横野恵氏（早稲田大学准教授）に説明していただいた後、グループで話しあい、質問だしをしました。ゲノム医療への期待と不安をグループで話し合いました。病気の予測ができて、早期治療につながることへの

期待はあるけれど、差別につながらないような法規制は可能か、マイナカードの普及状況からみてゲノム情報を用いた医療はまだ早すぎるのではないかなどの様々な意見が出てきました。

話し合いを踏まえて、自分のこととしてゲノム医療とどう向き合うかを、全員でカードに書いて貼りました。

今年は総合司会も、グループのファシリテーションも学部生・院生が担当し、開会に当たっては楽しいアイスブレイク（他己紹介）も行われました。



バイオカフェ



10月17日
オンラインサイエンスカフェ
「牧野富太郎とダーウィン」
同志社大学
渡辺政隆氏



11月4日
千葉現代産業科学館
「しょうゆのサイエンス」
キッコーマン株式会社
内田理一郎氏



11月30日
オンラインTTCバイオカフェ
「へその緒はオールマイティ」
東京大学医科学研究所
長村登紀子氏



2月27日
オンラインTTCバイオカフェ
「食料・農業・農村を考える」
宮城大学
三石誠司氏



総会記念講演会

日時 2024年5月16日（木）15:30-16:30

場所 銀座フェニックスプラザ



「ゲノム編集トマトを送り出して」

サナテックシードライフサイエンス株式会社 管理部 住吉美奈子氏

2020年12月、GABAというリラックス効果などが認められているアミノ酸を多く含むトマトが、ゲノム編集技術で作られ厚労省に届け出されました。その後、4000人余りの栽培モニターによって全国で栽培されたり、2023年度からはいくつかのスーパーマーケットで扱われたりするようになりました。食のリスクコミュニケーションの観点からも、このトマトが社会にソフトランディングしたことは注目されています。トマトの研究、作出、サナテックシード(株)立ち上げから関わってきた住吉氏をお招きし、このトマトの歩みとこれからについてうかがいます。

【プロフィール】

筑波大学第二学群生物学類卒業。同大学院生命環境科学研究科一貫制博士課程生命共存科学専攻修了。博士(理学)取得。名古屋大学URA、筑波大学 生命環境エリア支援室プログラムコーディネーターを経て、サナテックシード株式会社(2024年1月、サナテックライフサイエンス株式会社に社名変更)立ち上げより関わる。



※ 対面での開催を予定しております。参加ご希望の方は、氏名、ご所属、メールアドレスをご記入の上、下記までメールでお申し込みください。E-mail:bio@life-bio.or.jp

親子バイオ実験教室

※は子どもゆめ基金の助成を受けて行いました。

全国の科学館などで、親子バイオ実験教室を開きました。207名の子どもたち、大人たちと実験を楽しむことができました。コロナが収まって、オンライン実験教室は続いていて、家族の皆さんとワイワイと実験しました。

10月9日 親子バイオ実験教室 蒲郡市生命の海科学館 (※)

10月15日 三鷹科学の森「DNAをみてみよう」三鷹市駅前コミュニティセンター

12月2日 モデルナサイエンスクラス 多摩六都科学館

12月16日 オンラインサイエンスキッチン 赤門小規模保育園

1月21日 SDGsワークショップ 赤門小規模保育園

1月28日 「水と油の仲良しバレンタインケーキ」 稲城市iプラザ

2月12日 「和ぐるみカスターネットを作って防災を考えよう」 港区立みなと科学館

2月17日 親子バイオ実験教室 ぐんまこどもの国児童会館(※)



多摩六都科学館



蒲郡市生命の海科学館



稲城市iプラザ

講師派遣報告 2023年9月～2024年2月

9月26日～1月16日 東洋大学大学院「科学コミュニケーション特論・演習」講義

9月20日～1月9日 神奈川工科大学大学院「サイエンスコミュニケーション」講義

10月3日 札幌大学・アメリカ穀物協会共催フォーラム「バイオ燃料を考える」

10月16日 同志社大学サイエンスナウ「日本発ゲノム編集食品」講義

10月21日 長崎県食の安全・安心リスクコミュニケーション「遺伝子組換え食品について」講演

11月13日 福島大学アグリビジネス論「ゲノム編集食品をめぐるリスクコミュニケーション」講義

12月22日 神奈川工科大学「バイオ製品科学」講義

1月16日 東洋大学「植物バイオ」講義

2月3日 日本サイエンスコミュニケーション協会 サイエンスコミュニケーション実践講座 講演

2月8日 遺伝情報取扱協会 オンラインセミナー・意見交換会 講演



入会のご案内

私たちの活動を応援してくださる協力(個人)会員を(1口 2,000円～)常時募集中です。
会員になるとイベントに関する情報が優先的に得られたり参加費が安くなることもあります。
もちろん、バイオレター(紙媒体)もお届けします(2回/年)

編集後記：いろいろな医療の場面で人々が「幸せ」でいられるようにと願いを込めて、サイエンスアゴラ2023では「ゲノム医療法」をとり上げました。今回、難しかったことは「ゲノム医療」について私たちはほとんど知らないことでした。例えば、一昨年のサイエンスアゴラでとりあげた新型コロナウイルス感染症については、医療関係者でなくても、誰にも感染リスクがあり、感染の予防やワクチンには皆が直面していました。多くの人が身近に感じる問題は、サイエンスコミュニケーションで取り上げるには好都合です。まさにファラデーがクリスマスレクチャーで、日が暮れたら貧富を問わず利用する「ロウソク」を選んだのと同じです。その意味でゲノム医療は難しいと思いましたが、「知らないこと」を共通のスタートにし、学生・院生ファシリテーターたちはのびのびと世代を超えて参加者の発言を引き出していきました。サイエンスコミュニケーションの明日に期待を感じた経験でした。

特定非営利活動法人 くらしとバイオプラザ21

<http://www.life-bio.or.jp>

編集 佐々義子・二瓶美郷

カット 中村典子

〒103-0025

東京都中央区日本橋茅場町3-5-3

日宝茅場町ビル8階

電話：03-5651-5810

FAX：03-3669-7810

e-mail: bio@life-bio.or.jp

